

# 「余命半年」乳がんの妻 死去

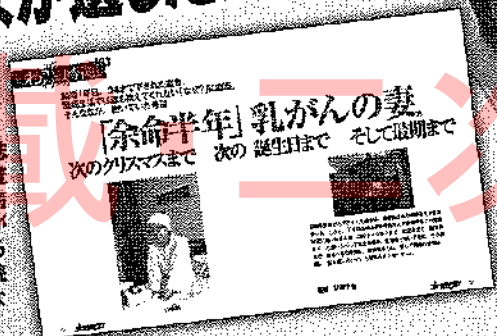
## 死の2日前 夫に託したパズワード

享年38

命のプロログ



### クリスマス、お正月こそ迎えられたものの… つらい闘病に耐えつつ、 彼女が遺したメッセージ



藤谷さんは本誌1月1日号に登場。彼女の闘病の様子や、乳がん治療に対する問題意識は、読者からの大きな反響を呼んだ。

藤谷さんの遺影が飾られた札幌の自宅で、正和さんはいまの心境を語ってくれた。

「今から肺の水素急で抜きます。」  
妻の藤谷ヘコさん（仮名・享年38）から送られてきたひと言。これが夫の正和さん（仮名・40才）への最後のメッセージとなった。  
札幌市内にある大倉山のジャンプ台を望むマンションの一室。やわらかな冬の日差しが注ぐリビングに飾られた藤谷さんの遺影の前で、正和さんが、妻が亡くなった日の様子を話し始めた。

「あの日は、札幌郊外にある追分と白老というところに出張に出ていたんです。だからいつもより少し早く、7時半  
数日前から食欲は落ち、調子もよくなかった。首の腫れも大きくなっていったが、この

1月21日の深夜、「ヘコの奇跡の物語が終わりました」というメールが編集部が届いた。乳がんと闘う中での疑問や怒りを訴える彼女を取材したのは2か月前。そのときには「クリスマスまでは、お正月までは…」と希望をつないで生きていると話していた。別れのことを覚悟しながら支え続けてきた夫が語った、彼女の最期の日々、そして聞き続けてきた彼女の思い――



病室のベッドで本のゲラをチェックする藤谷さん。



藤谷さんはお風呂が好きで、どちらかというと長湯だ。病院では他の患者さんのこともあり、なかなかゆつくりと湯に浸かることは難しい。自宅ですすめたいことは、「ゆつくりとお風呂にはいる」とだった。

「でも、妻はそういいながら、ブログのパスワードは、なかなか教えてくれなかったんです。」

「ドラッグ・ラグ（海外で使える薬が日本では使えないこと）や「ピンクリボン運動のファッション化」などについて、はばかることなく、多くの疑問を投げかけた。

「藤谷さんは乳がんの治療について正確に理解し、自分の病状や進むべき方向を冷静に直視していました。」

目も藤谷さんから正和さんへ、そして正和さんから藤谷さんへ、メールはいつも通りやりとりされていた。

「正和さん、急いで札幌へ戻り、15時30分に病院に到着。藤谷さんは酸素マスクをし、口の端には血の混じったピンク色の泡が見えた。」

「その翌日、正和さんが懸命に妻の名を呼ぶと、藤谷さんは彼に視線を向け、呼びかけに頷いた。」

「心配になって病院に電話を入れました。そうしたら、いま処置をしています。まだ命にどうこうという状態ではありません。」

「医師としては反対ですが、人としては止められない」と渡邊医師はいつた。

昨年11月末、本誌のインタビューに答えてくれた際の藤谷さん。



「死の2日前、パスワードを託されて」

「妻もほくも、ふたりで書店に行くと、本が並んでいるところを見るのを楽しみにしていたのですが、それは叶いませんでした。」

「最初の告知から1年。つねに病氣や治療による苦痛と闘いながら、それでも藤谷さんは前向きに、最期まであきら

色違いの2台のiPhoneが病室にいた藤谷さんと会社にいる正和さんをつないでいた。